

太平記 三

山下宏明 校注

新潮社版

新潮日本古典集成（第五八回）
太平記 三

定価二二〇〇円



昭和五十八年四月五日 印刷
昭和五十八年四月十日 発行

校注者 山下宏明

発行者 佐藤亮一

印刷所 大日本印刷株式会社

発行所 株式会社 新潮社

〒一六二 東京都新宿区矢来町七一
電話 東京 03(二六六)五一二二(業務)
東京 03(二六六)五四一一(編集)
振替 東京 四一八〇八

装画 佐多芳郎
組版 シーティエス大日本
製本 加藤製本株式会社

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Hiroaki Yamashita, Printed in Japan, 1983.

ISBN4-10-620358-8 C0393

目次

凡例 七

卷第十六 一三

將軍筑紫へ御開きの事 一五

少弐、菊池と合戦の事付けたり宗心藏主が事 一七

多々良浜合戦の事付けたり高駿河守例を引く事 二〇

西国蜂起官軍進発の事 二八

新田左中将赤松を攻めらるる事 三〇

児島三郎熊山に旗を挙ぐる事付けたり船坂合戦の事 三四

將軍筑紫より御上洛の事付けたり瑞夢の事 四三

備中の福山合戦の事 四四

新田殿兵庫を引かるる事 四六

正成兵庫に下向の事 五七

兵庫海陸寄手の事 六三

本間孫四郎遠矢の事 六五

経島合戦の事 七〇

正成兄弟討死の事	七
新田殿湊川合戦の事	七
小山田太郎高家青麦を刈る事	八
聖主また山門へ臨幸の事	八
持明院・本院東寺潜幸の事	九
日本朝敵の事	九
正成が首故郷へ送る事	九

卷第十七

山攻めの事付けたり日吉神託の事	九
京都両度軍の事	一三
山門の牒南都に送る事	一五
隆資卿八幡より寄せらるる事	一八
義貞軍の事付けたり長年討死の事	一四
江州軍の事	一四
山門より還幸の事	一五
諸君を立てて義貞に着けらるる事付けたり鬼切日吉へ進ぜらるる事	一五
義貞北国落ちの事	一六
還幸供奉の人々禁殺せらるる事	一六

○ 北国下向勢凍え死の事	一六六
○ 瓜生判官心交はりの事付けたり義鑑房義治をかくす事	一六九
○ 十六騎の勢金崎に入る事	一七七
○ 金崎船遊びの事付けたり白魚船に入る事	一八〇
○ 金崎の城攻むる事付けたり野中八郎が事	一八三
卷 第 十 八	一八九

先帝吉野へ潜幸の事	一九二
○ 高野根来と不和の事	一九六
瓜生旗を挙ぐる事	一九九
越前の府の軍ならびに金崎後攻めの事	二〇六
○ 瓜生判官老母が事付けたり程嬰・杵臼が事	二二一
金崎の城落つる事	二二六
春宮還御の事付けたり一宮御息所の事	二三五
○ 比叡山開闢の事	二五五
卷 第 十 九	二六九

光嚴院殿重祚の御事	二七一
本朝の將軍補任兄弟その例無き事	二七二

新田義貞越前の府の城を落す事	二七三
○金崎の春宮ならびに將軍の宮御隠れの事	二八二
諸国宮方蜂起の事	二八五
○相模二郎時行勅免の事	二八七
○奥州の国司顕家卿ならびに新田徳寿丸上洛の事	二八九
○奥勢の跡を追うて道々合戦の事	二九五
○青野原軍の事付けたり囊沙背水の事	二九九

卷第二十一

黒丸城初度軍の事付けたり足羽度々軍の事	三二七
越後勢越前に越ゆる事	三二九
宸筆の勅書義貞に下さるる事	三三一
義貞山門に牒す同じく返牒の事	三三三
八幡炎上の事	三三一
義貞重ねて黒丸合戦の事付けたり平泉寺調伏の法の事	三三五
義貞夢想の事付けたり諸葛孔明が事	三三七
義貞の馬属強ひの事	三四五
義貞自害の事	三四七
義助重ねて敗軍を集むる事	三五三

○ 義貞の首獄門に懸くる事付けたり勾当内侍の事	三五四
○ 奥州下向勢難風に逢ふ事	三六三
○ 結城入道地獄に墮つる事	三六六

卷第二十一

○ 天下時勢粧の事	三七七
○ 佐渡判官入道流刑の事	三七九
○ 法勝寺の塔炎上の事	三八四
○ 先帝崩御の事	三八七
○ 南帝受禪の事	三九三
○ 遺勅にまかせ綸旨を成さるる事付けたり義助黒丸城を攻め落す事	三九四
○ 塩冶判官讒死の事	三九四

卷第二十二

○ 畑六郎左衛門が事	四二九
○ 義助吉野へ参らるる事ならびに隆資卿物語の事	四三九
○ 佐々木信胤宮方に成る事	四四六
○ 義助予州へ下向の事	四五三
○ 義助朝臣病死の事付けたり頼軍の事	四五六

○ 大館左馬助討死の事付けたり篠塚勇力の事…………… 四六四

解 説…………… 四六九

付 録

太平記年表…………… 四八五

系 図…………… 五〇一

地 図…………… 五〇九

凡 例

一、第二分冊に続いて、この巻には巻第十六から巻第二十二までを収めた。底本には、前二冊と同様江戸時代に入り古典刊行の機運が高まる中で刊行された流布本のうち、慶長八年古活字本を用いた。慶長十年古活字本・寛永版本を以って校訂を加え、その部分については頭注にことわった。

一、底本は、漢字・片仮名交じりで、時に漢文表記を交えるが、本書では、これを読みやすくするため、およそ次の方針に従って改めた。

* 片仮名を平仮名に改め、漢文表記は読みく니다。ただし、文中に引用される漢詩・偈ゴの類は、作品の効果を考慮して原文の表記を残す。

* 現代国語における仮名書きの基準に従い、感動詞・代名詞・接続詞・副詞・助詞・助動詞などの多くは、仮名書きに改める。

* 仮名づかいは、歴史的仮名づかひにより統一する。

* 送り仮名は、原則として新送り仮名の方針に従う。

* 漢字・仮名の表記は、通行の表記による。なお底本には、あて字が見られるほか、「剋」と「刻」、「責」と「攻」、「甲」と「胃」など、同じ語でありながら表記の不統一がしばしば見られるが、つとめて通行の表記に統一する。

*読みは、原則として寛永無刊記整版本の振り仮名に従うが、清濁など現代の読みと異なる語、訓読みと音読みの区別を示すべき語、それに人名・地名・年号・官名など、必要に応じて読みを補い、いずれも歴史的仮名づかいによって示す。

*音便は、寛永版本に表記のあるものはそれに従い、表記のないものは『平家物語』の語りを参照して適宜判断した。

*くりかえし符号は、漢字一字をくりかえす場合の「々」を用いるにとどめる。

*本文に、適宜、句読点や会話の「」、段落をほどこす。

一、傍注（色刷り）は、本文の読解を助けるため、簡潔に現代語訳を行ったものである。なお、主語や接続詞などは「」で、補足説明は（）でくくって示した。ただし、スペースの都合で、傍注とすべきものを頭注に移した場合もある。

一、頭注では、人名・事項の説明や解釈、本文の校異、傍注の補足、論旨の説明などを行った。また、各章段もしくは段落の内容について、*印を付して簡単な説明を加えた。なお色刷りで、適宜小見出しをつけた。

一、作品の構成の理解を助けるため、各巻頭に所収年代とその内容を略述した。

一、本巻巻末の解説では、物語としての『太平記』に大きな役割を果たす女性をとりあげ、その意味を考えた。なお、付録として、年表、系図、地図を収めた。

一、本書の校注を行うにあたり、古くは『参考太平記』『太平記抄』『太平記考証』など江戸時代の注釈をはじめ、新しくは佐伯常麿・永積安明・後藤丹治・釜田喜三郎・岡見正雄・高橋貞一・市古貞

次・大曾根章介・山崎正和・青木晃・長谷川端・増田欣の諸氏の注釈・テキスト・口語訳・研究から学恩を受けた。一々ことわらないが、ここに記して感謝する。

一、貴重な御蔵書の利用をお許しくださった横山重氏（慶長八年・十年両古活字本）および長谷川端氏（寛永版本）にお礼を申し上げる。なお、本文の作成に、今井正之助・長坂成行両氏の協力をえたことを申しそえる。

太平記三

太平記 卷第十六

卷第十六の所収年代と内容

◇建武三年（一三三六）二月上旬から五月下旬まで。

◇卷第十五において建武政権に対し兵を挙げ上洛をとげた足利尊氏は、京都の合戦に敗れ、兵庫へ退却、大友の言を容れ九州へ志した。本巻は、その筑前到着に始まる。宗像・少弐の協力を得た尊氏は菊池を破り九州を平定、それを知った京都では、足利の上洛に備え新田義貞らを中国へ派遣する。ところがその新田軍が赤松らの反抗にあつて時を過すうちに、足利軍は神助をも得て海・陸両路に兵を進めた。新田軍は、京から下った楠正成の率いる軍と合流し湊川に足利軍を迎え撃つが敗れ、正成らは自害、新田軍は京へ退く。後醍醐天皇は東坂本（比叡山）へ難を避けるが、光厳院ら持明院統の人々は、尊氏の待機する東寺へ入る。